

大学出版

'98 冬

No.36



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



大学出版
36号

Winter・1998

読書の周辺 木を見て森を見ぬ者の弁	1
読書の周辺 『日本教育史資料』を読む	6
東南アジアの大学出版部(上) — 開発をになうその学術出版 —	11
新業務システム導入の目的と役割	16
歩く・見る・聞く— 知のネットワーク	18
大学出版部ニュース	20
新刊案内'97・10 〱 '97・12	28
製作の現場から	33

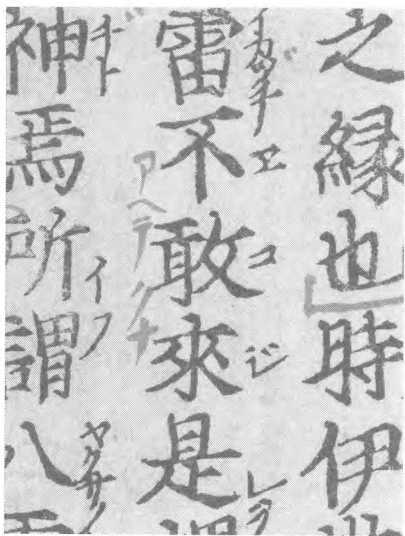
表紙イラスト ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛
〔書籍の価格は本体価格で表示〕

木を見て森を見ぬ者の弁

文学作品や古典籍を、ことばの資料として見る毎日をくり返していると、どうしても「木を見て森を見ない」読み方に偏ってしまうことが多いが、これは決してほめられたことではない。やはりいくら細かく木の一本一本を分析しようという場合でも、全体としての森を見据えることを忘れては、書いた人の意図を無視して資料を切り刻むことになってしまいかねない。「木を見て森を見ず」は常に忘れてはならない自戒である。ただ自身を省みると、これは専門領域の特性の問題というよりは、むしろ私個人の性癖に因ることのようで、子供の頃から既にそういう傾向にあったのではないかと思われるフシが、記憶のあちこちに残っている。

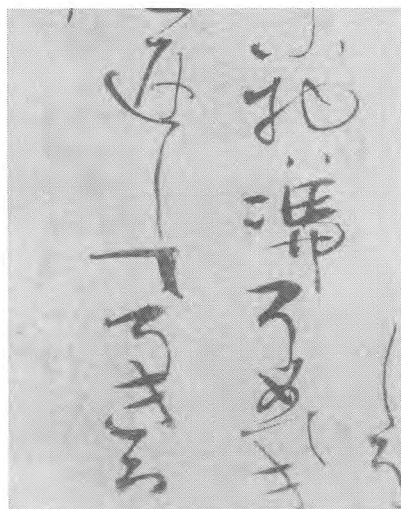
しかしそれでも、時にはその読み方が、思わぬ大魚を釣上げたりすることもある。漢文訓読語を専門にする直接のきっかけになったのもまさにその一つであった。偶々手にした、ある寛文九年版本『日本書紀』の神代巻に、何者かによる書き込みがあって、そのうちの一句が他に例を見な

いものように思われたことが発端である。一字一字の訓読を辿る中で、「おや？」と思う例に出くわして、今までの考えではなかなか説明がつかず、とうとう改めて「訓読」ということを今一度別の方向から見直してみよう、と思いついたわけで、爾来二十年近くこれに関わり合い、ようやく自分なりの一区切りを付けることができたものの、やり



家蔵寛文九年版『日本書紀』神代巻上の問題の箇所。左傍の朱の書き込みが最初に気になった部分。

杉浦克己



定家自筆『古今和歌集』（伊達家旧蔵本卷十二・554番歌結句部分）
（久祖神昇編『藤原定家筆古今和歌集』平成3年・汲古書院から）

残していることの方がはるかに多く、おそらくはこれから
もずっと関わり続けることになりそうである。

専門を少し離れたところでも、藤原定家自筆本『古今和歌集』（いわゆる伊達家旧蔵本）の五五四番歌の結句「返してそぎる」の「し」と「て」の間で墨継ぎが行われている（ように少なくとも私には見える）のはなぜか、ということに前後数年にわたってこだわって、とうとう助詞の「て」や「ぞ」について自分なりの見解をまとめあげる仕儀になってしまったことがあった。

これも、最初は「あれっ？」と気になった程度のことだったのだが、やはり自分の思う文法的な切れ続きと、目の前にある資料上の事実の間の違いをうまく説明できない、という思いから出てきたことである。

こういう「大魚」を幾度か経験すると、当初の自戒はどこへやら、「木なんか見ていない。葉っぱの一枚一枚を見ているのだ。」などと嘯いて、顕微鏡でも持ち出しかねない勢いである。近頃はこれが学生さんの間にも伝染しはじめたらしい。先日、夏目漱石の『吾輩は猫である』について、「くは……である。」型の文と「くが……である。」型の文を較べると、前者は第一章から頻繁に見えるのに、後者は第二章以下にしか見えない事実を報告してくれた学生さんがいた。小説の類に見える「は」と「が」の用いられ方の違いは、芥川龍之介の『羅生門』の例が両者の差異を端的に表したものととして夙に有名であるが、どうやらこの「猫」の例は、従来説に少し異なった新たな視点を加えるもののように、書きぶりが似ているように思われる『虞美人草』を改めて調べてもらったら、やはり同様のことが看取できた。特に『虞美人草』の特色の一つである会話の連続場面で、それまでの発話を受ける形で「くが……である。」型の文が頻用され、あのテンポの良さの秘密はこの辺りにあるのではないかと、とさえ思われてくる。

これ以外にも、『康熙字典』『米国の小学教科書』『歌謡曲の歌詞』『児童・生徒の作文』等々と出所は様々だが、学生さんたちが持ち込む興味深い発見は枚挙に暇がない。何れも「あれっ？」「おやっ？」といった微かなアタリを見逃さない緊張を保ちながら、一つ一つこつこつと積み重ねていったからこそ出てきたもので、他から見れば大変な根

気と労力を要することのように見えるのだろうが、それはそれで、根が好きな者にとつては、釣果はさておいても作業自体が結構楽しいのである。

とはいもものやはり、たまには仕事を離れて本来の、つまりは書いた人の意図に沿ってゆっくりと読書を楽しみたい、という気持ちに駆られることがある。

そんな気持ちからドイルのシャーロック・ホームズものを少し読んでみた。元々いわゆる推理・探偵小説の類は嫌いな方ではなかったのだが、ホームズは子供の頃に数編読んだばかりであった。どちらかというと、NHKで放送されたグラナダTVの Jeremy Brett 主演のシリーズでホームズのイメージを作り上げていた方だから、あまり正統的なファンではない。今般も、偶々娘が宿題の感想文用に買っ込んでいた『冒険』の少年文庫版を拝借したのがきっかけで、積極的に読みたくてとりかかったわけではない。

ところが、やはり名作と呼ばれるものは名作である。活字の向う側に、いきいきと情景が展開し人々が活躍するこの手の小説本来の世界の楽しさを徐々に味わった。米国の人気TV番組スタートレックの新シリーズに登場する、個性的なアンドロイドのデータ少佐が熱中するのも宜なるかなである。ストーリーと描写の巧にぐいぐい引っぱられて、森の中をすごい勢いで駆け抜けていくようで、一つ角を曲るたびに現れる新鮮な世界の快感を求めて、娘をはるか追い越して、ハヤカワ文庫版のホームズ全部を一気に読んで

しまった。それどころか、さらには新潮文庫・創元推理文庫と次々に買い込んで、読み漁ることとなってしまった。つまりはごく短期間で邦訳三種を何回も繰り返し読み比べたわけで、今流行のことはば言えはまさに「ハマッ」てしまったのである。

家人に言わせると、私は時折、何年かに一回くらいの割合で、流感にでもかかるようにこういうことがあるのだそう、今回のホームズはその浅く中程度、という診断であった。言われてみると確かに、わが家にはそれら熱中の夢の跡の残骸（＝往時の宝の山、家人から見れば今も当時も単なるがらくた）が数多く存在する。本であったりレコードであったり、模型の類や巨大なジグソーパズルであったり、オーディオや無線の機器であったり、相互にほとんど脈絡がない上に場所塞ぎなものばかりで、自分ながら始末が悪いのであるが、思い返すとそれぞれに当時の思い入れがありありと浮んでくることも事実である。その分野全体にひどく興味をそそられたからこそあれこれと蒐集することになったのであるが、各々にかなりはつきりしたきっかけの一事があったこともよく覚えていいる。

例えば、ある時期発売されていた限りのベートーヴェンの「第九」のレコード類を聴き較べたことがあったが、これは偶々聴いたオーマンディ指揮のフィラデルフィア管弦楽団の演奏の、第二楽章の前半の繰り返し部分の木管の和音があまりにきれいで、それまでに耳慣れていたあの演奏

とも異なるように思われたからだし、シャーロット・ランプリングの出演する映画をあれこれ見較べたのは、「愛の嵐」のラスト近くで彼女が見せた独特の笑顔が、他のどんな女優のそれとも異なる不可思議なもので、連動して現れる顔の向きや首筋の所作などと併せて、どのような感情に基づく演技なのかを自分なりに見極めたかったからなのはあった。

今般のホームズにも確かにそういうことがあった。当初は小説としての面白さそれ自体に惹かれたからなのではあるが、それを一気に加速するアフターバーナーとなったのは、『シャーロック・ホームズの復活』（書名・作品名は以下特に断らない限りハヤカワ版による）の中にある「チャールズ・オーガスタス・ミルヴァートン」である。この話は、どちらかと言えばホームズの失敗譚で、ストーリーそれ自体もスリルがある上に、「オチ」も付いていて面白く、私の最も好きなものの一つである。問題の貴婦人がいったい誰なのかといったことについては、おそらく遠の昔に熱心なシャーロックアンの方々によって十分な考察が行われ、解決を見ているのであろうが、私が「おやっ？」と思ったのはその題名である。原題は他の多くの作品と同様に、「The Adventure of くゝ」が冠してあって『The Adventure of Charles Augustus Milverton と くゝ』いかにも邦訳しにくく、うなむものじゆめ。『Adventures of Sherlock Holmes が『シャーロック・ホームズの冒険』なら、これは「チャー

ルズ・オーガスタス・ミルヴァートンの冒険」となってしまうかねず、これでは悪役の冒険譚で、話にならない。要は複数形と「the」の有無に絡んだ「of」の訳し方の問題なのだろうが、「Adventure」という語自体についても、ホームズの側から見れば事件そのもの、いわば「冒険」だが、ワトソンの立場ではあくまで事件録、つまりは「冒険譚」なのであって、本作の収められた『復活』の原題『The Return of Sherlock Holmes』の「Return of」と同列には扱えないという問題もありそうな気がする。

だいたい、「The Adventure of くゝ」のシリーズの題に見える「of」は曲者で、「くゝの冒険」というよりは「くゝにおける冒険」「くゝについての冒険」程の意、強いて各作共通に訳せば「くゝにまつわる冒険譚」といったところなので、そんなまごころこしい題を付けるわけにもいかないように、邦訳の各版ともに苦心の跡がうかがわれる。ハヤカワ版は「The Adventure of くゝ」の部分なしの題を基本にしていて、これは英国内の出版でも見える例をふまえてのことらしい。創元版は、本作では意を取ってわかりやすく「恐喝王ミルバートン」としている。それらと較べると新潮版の「犯人は二人」は、オチまで意識したなかなかしゃれた訳題である。これは末尾近くのレストレード警部の発話

“……Yes, There were two of them.”

をふまえたものであるが、この発話の「of」も、別の意

味で面白い。念のため本稿を草するにあたって、グラナダTVの録画を見直したら、邦題は「犯人は二人」となっていたが、レストレイド警部の発話の場面はなかった。グラナダのシリーズは、原作にはない味付けが随所に見られ、ホームズに既に慣れ親しんだ視聴者にも面白く作ってあるのだが、TVの英語原題は『The Master Blackmailer』¹⁾これは偶然にも創元版に近い。さらにその味付けの断り書きが“Based on ‘Charles Augustus Milverton’”と付いて、図らずも邦訳の題に似た三種がタイトルに並ぶ形である。

あらぬところでまたぞろ「木を見る」ことになってしまったのだが、偶々日本語の助詞「の」が、中国語の「的」の用いられ方に絡んで気になっていたこともあって、いやが上にも“of”が目についてしまったようである。

中国語を母語とする日本語学習者が、「の」をそのまま「的」と置き換え可能と考えてしまっ、なかなかうまく使えないということは、日本語教育の現場に携る先生方からよく聞く話であるが、間に英語の“of”を置いて考え直してみるとどうなるのだろうか、という興味から、中・英・日三か国語をこなすインフォーマントの協力を得て、少し調べてみたりしたことが頭の隅に残っていて、今般の「おやっ？」もその延長上なのかもしれない、などと思いつつ、とうとうホームズものの原著をあたって“of”の用例を蒐集・整理することになってしまった。

抜き出した当該部分を邦訳と並べながら比較してみると、なかなか面白そうで、いよいよ大魚の感触である。わけてもストーリー展開上鍵になりそうな会話の場面、特にホームズ自身の発話のそれなどは、独特の用法と思われるようなものもあるようだし、著作の年代による用法の偏りも見え隠れしはじめ、作品の根幹に関わる表現上の事例か、と期待も浮んでくる。勿論このようなことは、英文学や英語学の専門の方に尋ねれば即座に答の出ることなのだろうが、娯楽として取り組むにはパズルにも似て好適な材料である。しかし、どうやらこの辺りが私の限界で、当面は「の」や「的」の方を片づけておいて、ここから先は改めて修業を積んだ上で再挑戦、ということにならざるを得ないようだ。と、一旦あきらめかけると、熱は急速に冷めてしまい、集めた資料の数々は既に「夢の跡」のがらくたの方へ移りつつあって、当分お蔵入りの様相である。

ホームズものの初作『緋色の研究』は原題 *A Study in Scarlet* だが、いつの日か *A Study in “of” on Sherlock Holmes* などでうち上げることができれば、ベーカーズリート・イレギュラーズ・バリツ支部の入会審査論文として受理していただけるであろうか。“on”ではだめかも知れないが……)

(放送大学助教授)

『日本教育史資料』を読む

神辺 靖光

一

知的興奮を覚える論文や深い感銘をもって読了できる古典。これらの読書も人生の愉悦であるが、どう読んでよいかわからない記録を好奇心につられて他の文献に頼りながら読み進めるのも楽しいものである。

ここに『日本教育史資料』という浩瀚な書物がある。A5版一行五三字二四行、総頁六、三三二、全二五巻、九分冊、附録・学校図面一三点。明治十六年二月から資料の収集をはじめ、明治二十三年七月に第一冊刊行、第九冊の刊行終了は同二十五年九月である。

江戸幕府や各藩の学問奨励、武芸の流派、昌平坂学問所をはじめとする幕府の諸学校、各藩の学校、学者の伝記、郷学校、私塾・寺子屋といった各種の教育施設が網羅的に記載されている。明治四、五年までが目安とされたが、なかには明治二十年頃まで書かれた箇所があるから江戸時代の教育を研究しようとする者、明治維新期の教育史研究者

は一度はこの書を手にする筈である。

私がこの書物にはじめて接したのは今から四十数年前、大学院学生の頃であったが、敷き詰められた漢字の紙面に圧倒されて、眺めるだけで十年の歳月を過ごした。その後、この書物を神田の古書店で求め、必要な箇所だけ読むことにしたが、内包する意味が読み取れなくて往生することしばしばであった。そこで六人の仲間と語らってこれらの読解にとりかかったのが昭和五十二年であった。爾来、今日までか細く、しかし息長く読み続けているが、日暮れて道通しの感はまだまぬがれない。

二

この膨大な書物がなり立った経緯をまず述べておこう。明治の新政府は西洋にならった学校制度をつくろうとして欧米の教育を調べはじめた。それらの翻訳書や報告書類は相当な数にのぼる。しかし明治十年代の半ば頃から範を西洋にとるだけでなく、幕藩時代の日本の教育を見直して新

しい学校にとり入れようとする主張が起った。明治十五年、文部省は「本邦教育沿革史」の編さんを思いたち、翌十六年二月、全国の府県と旧藩主家に対し、そのための資料の収集と教育調査を命じた。調査内容は

一、旧藩学制の沿革

二、旧藩立学校（江戸藩邸内学校を含む）

三、旧領内の家塾（寺子屋）

であるが、一については藩主の布令諭達、学事奨励法、士族卒の教育法、平民の教育法と参考資料。二については学校の名称、所在地、沿革、教則、学校学期試験法、教育関係の職名、俸祿、職員生徒数、束脩謝儀、学校経費、藩主臨校、祭儀、学校の構造図面、学校で出版した書物、蔵書等。三については家塾の名称・所在地、塾主の氏名、教師数、生徒数、授業の順序、教科書、修学年限、束脩謝儀、塾主の行実、著書蔵書、塾の沿革等、調査項目が列挙されていた。

家庭での躰や若者組など、家庭や地域社会で学ぶしきたりや職人、商人の徒弟教育に関する調査項目はない。文字学習と学問・武芸の稽古、これらを学校と塾に照準して調査するといったものであった。

これが発起された明治十五年はこれまで試行錯誤をくり返してきた急進的な教育改革から脱して、おぼろげながら学校制度の輪郭が見えはじめた時である。文部省があげた調査項目はこれからつくろうとする学校の姿を旧幕藩時代

の学校や塾に求めたのである。そこにこの調査が実際と乖離する無理があった。『日本教育史資料』を読む前提としてこのことを知っておかねばならない。

調査命令を受けた府県は管下の郡役所に調査を委嘱し、郡役所はさらに管下の戸長役場（後の町村役場）に委嘱する。前田家のように領地が石川県全域に及ぶような大藩の調査は石川県が前田家の藩史編さん方にこれを委嘱したが、滋賀県のように小藩が林立するところは郡役所→戸長役場と下って調査者、執筆者を採すことになる。文部省は一方で東京在住の旧藩主家にも調査を依頼した。つまり

文部省└─府県庁└─郡役所└─戸長役場
└─旧藩主家

というルートで調査が開始され、右のいずれかの段階で調査者、執筆者が決まり、調査執筆完了後、逆のルートで文部省に調査資料が集ったのである。調査執筆者が府県庁、郡役所、戸長役場で選定した人と旧藩主家を選んだ人と偶然、同一人であったという例もある。

藩校の調査執筆者は旧藩時代、藩校に関係した者か、藩史の編さん者であった。家塾・寺子屋の調査執筆者は郡役所・戸長役場が依頼した学務委員や役所・役場の吏員であった。

文部省が設定した原稿の提出期限は明治十六年八月末日であった。期限までに提出したものもある。しかし多くは期日に遅れた。提出期限の延期願が各地から出された。文部省はこれを認めたが、延期に次ぐ延期で明治二十二年に

至った。もはやこれ以上延期しても完全は望めない。文部省は調査を打ち切った。未進達の藩校資料や寺子屋未調査の地域があるとは言え、文部省に集った教育沿革史資料は膨大な量になった。内容も精粗まちまちである。ここにおいて文部省は当初の「本邦教育沿革史」の編さんをあきらめ、集った調査資料を分類、収載する。「日本教育史資料」の編さんに変更したのである。かくして文部省総務局が主務者となって明治二十三年七月から逐次刊行、二十五年九月をもって終了した。

三

『日本教育史資料』の読み方のむずかしさは資料と調査記述が不規則にまざり合っていることである。「旧足利藩」をみるといきなり「足利学校学規」がでて説明がない。「旧会津藩」では

学制

学事上諸制度

藩主ノ布令

学校文武修行ニ付御定

(以下十四条)

となっている。前三行は調査時に入れた文であろう。「学校文武修行ニ付御定」は十四条の題簽か、後からつけた表題か、現物をみなければわからない。「旧福井藩」もこの例に洩れない。

学事上ノ諸制度

嘉永三庚戌年七月十日家老本多四郎右衛門宅へ文武之師範を招き演述

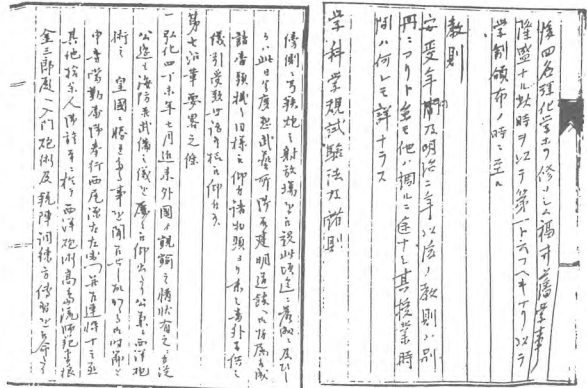
文武之儀は是迄御世話も有之事特に近来は、別て御苦勞被為在候は承知之通に候得共(以下略)

右のうち「文武之儀」以下が資料である。これほど読みにくい本である。初心者には戸惑い敬遠する。

それはさておき、福井藩学校の「沿革要略」は奇妙な文体である。

越前福井藩の学事は藩祖・松平秀康がこの地に入封した時から始まった。文政二(一八一九)年、城下桜の馬場に正義堂という学問所を設け、安政年間(一八五四―五九)に城内三ノ丸に明道館を開き、明治三年に教育改革、明治四年、外国人教師を招いて理化学を学習。明治五年、学制頒布と時系列に沿って教学の沿革が記されているが、ここで突然「弘化四丁未年七月、近来外国より覬覦之情状有之」と弘化嘉永(一八四四―五三)の時代に遡り、西洋砲術研究のことが叙述されるのである。これを一体どのように読めばよいのだろうか。

この疑問は福井市にある県立図書館松平文庫所蔵の「旧福井藩学制沿革取調書」(Aとする)、「旧福井藩教育沿革取調書並二旧藩士ノ内学事尽力者小伝」(Bとする)の二簿冊と福井県庁・足羽吉田郡役所の往復文書によって氷解した。A文書は旧福井藩教育沿革史の最初の原稿である。弘



旧福井藩学制沿革取調書(A)

旧福井藩教育沿革取調書並
二旧藩士ノ内学事尽力者小
伝(B)

化嘉永の頃から異国船が日本の沿岸に出没しはじめた。これに大名や武士達がどんなに驚がくし危機感を抱いたか。福井藩は一藩あげて旧来の学問武芸を廃し、西洋科学技術を基礎とする近代軍隊の形成に乗り出した。それを作り出すのが藩校明道館であった。「明道館之記」(安政三年・松平慶永書)もこのことを書いている。これらには近代学校を生み出す契機が生々しく描かれ、迫力がある。

この原稿は明治十六年末、足羽吉田郡役所から福井県庁

に届けられたが、県庁はこの内容を不可として再調査を命じた。時は明治十六年、すでに弘化嘉永の頃の外国船に対する恐怖感は薄れ、学校と軍隊は分離していた。政府の考える学校は武士の軍事学校ではない。県庁が郡役所に再調査、書き直しを命じたのはそれであった。郡役所は命じられたまま、書き直し、明治十七年九月、県庁に進達した。これが第二次原稿B書である。B書は藩祖松平秀康以来の藩の学事を時の流れに沿って叙述し明治維新に至る。しかし幕末維新期に起った危機感から発した学校設立の熱気は伝わってこない。第二次原稿のそっけない幕末維新期の記述を読んだ県庁の編さんはB書にA書を無造作につないで文部省に送付した。これがそのまま『日本教育史資料』の「旧福井藩学校沿革要略」になったのである。乱暴な編集で読者が戸惑うのも無理はない。

越後高田藩の学校「沿革要略」は三つの原稿をつないだものである。上越市高田図書館庄田文庫に三文書が所蔵されている。庄田文庫は旧高田藩士・藩校修道館監察で「旧高田藩教育沿革史」編さん者の一人・庄田直道の蔵書を収めた文庫である。ここに次の文書がある。

「旧高田藩学制沿革調書」(Aとする)

「旧高田藩文武教育沿革概略」(Bとする)

「旧高田藩修道館設置ノ所以」(Cとする)

④は文部省の指令に従って書いた「教育沿革史」の原稿。⑤は藩祖榊原康政以後、歴代の藩主を中心に文武奨励の事

跡を書いたもの。◎は学校設置の理由を書いたものである。『日本教育史資料』の「旧高田藩学校沿革要略」はこの三文書を切り張りしたものであるが、武芸や軍事教育の部分は切りとられ、幕末の逼迫した様子は伝わってこない。

四

若狭小浜藩の「学校沿革要略」も難解である。享保以前に藩士をある学者に就かせて学ばせたことに始まって以下、学者の招聘を幕末まで書きたてている。これでは藩校順造館がいつできたのかわからない。教育史家は学校には起源がなくはならぬとしていろいろな説をたてている。小浜市立図書館所蔵の「旧小浜藩学制沿革取調要目」と早稲田大学図書館所蔵の「安永三年小浜藩家臣由緒書」によってみると次のようになる。

寛保年間（一七四一—四三年）、小野鶴山を藩儒とした。専任教員が決ったのである。明和年間（一七六四—七一年）、西依西斎とその子・墨山、中堂謙山の三人を迎え、明和七年に西依墨山を教授役にした。「教授役」という職が藩にできたのである。この四年後の安永三（一七七四）年に順造館という校舎がたち、天明二（一七八二）年に学則ができたのである。現在の学校のようにこれらが一斉にできて設置認可開校というわけではない。

校舎ができるまで授業はどこでやったか。恐らく大名屋敷の広間でやったろう。それも毎日やったわけではない。

上総久留里藩の「学校沿革要略」の原稿は旧久留里藩士・森勝蔵が書いた（成田文化財団成田図書館蔵「久留里藩学制沿革概録」）。これによると久留里藩では江戸藩邸で徳川綱吉が論語を講じたり、太宰春台や荻生徂徠が講釈したりしている。寛政十（一七九八）年には柳井亀山が久留里から江戸に移り、幕末には鷲津塾堂が江戸詰の教師になった。藩主の黒田氏は代々幕府の要職についていたため、江戸在府期間が長く領地久留里に帰るのは年一ヶ月ほどであった。久留里藩の授業は江戸下谷大名小路の藩邸広間で行われていたのである。

『日本教育史資料』には一一七の江戸藩邸学校が記されているが、上総佐貫藩、下総多古藩、高岡藩は江戸藩邸学校だけで領地の学校の記録がない。下総佐倉藩や上州沼田藩は領地の学校と江戸藩邸学校と両方書いているが江戸藩邸学校に力がかかっているように読める。江戸時代の学校を現在の学校からみて想像することはできないのである。

『日本教育史資料』の正本は見出せない。しかし文部省に進達した原稿の控本は各地の図書館・文書館で見出すことができるし、原稿作成時に用いたと思われる史料も披見できる。『日本教育史資料』を読み通すにはこれらと照合しなければならない。こういう読書もまた楽しいものである。（明星大学教授）

東南アジアの大学出版部(上)

開発をになうその学術出版

箕輪 成男

マニラ、クアラルンプール、ジャカルタ、東南アジアの首邑はいまどこもビルラッシュだ。一九七四年に訪れたジャカルタの新市域は日本資金で建てられたインドネシアホテル以外一望遮る物とてない原野であったが、今では高層ビルが櫛比するビジネス街になった。まさに桑田変じて滄溟と化すという古言のとおりである。どの都市も車の氾濫で、渋滞は日常のことになった。新設のショッピングモールやデパートには商品が溢れ、それ以上に人々の熱気が溢れている。

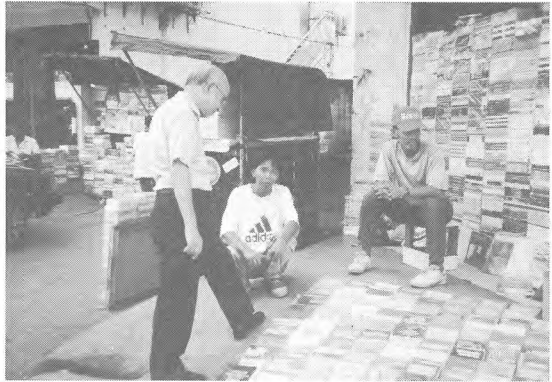
開発の戦略は国によって異なるし、歴史的、政治的背景もとりどりだから、開発成功の度合は一樣ではない。独裁政治への不満や、構成民族間のきしみなど、深刻な問題も抱えている。しかし東南アジアの開発は、地球上の他の地域に比べればるかに成功しているといつてよいだろう。

開発に向かって邁進する東南アジア諸国には、高等教育に対する社会の強い信頼と期待がある。「大学は出たけれど」というシニシズムが発生する余地はまだない。より高い学歴はよりよい就職、よりよい給料を約束してくれると少なくとも若い人々に信じられている。例えば、今年来日

したマラヤ大学メディア学科のアジザ先生によれば、同学科の今年の卒業生三六人のうち、奨学金の関係で義務として教員になった六人を除く三〇人は、出版社、新聞社、テレビ会社、CATV、広告会社に全員就職し、入学希望者が多いので、いま学科から学部を拡大することを考えているという。だから、どの国でも高等教育は盛況である。大学と学生の数を見ると、四年制大学だけでフィリピン約二〇〇校一七〇万人、インドネシア二七四校、推定一五〇万人、マレーシア三一校三〇万人であり、高等教育が普通教育化した日本の五三四校(一九九三年)三〇〇万人にくらべても決して少ないとはいえないだろう。

こうした高等教育の拡大にともなって、膨大な教科書需要が発生している。一九七四年に訪れた、インドネシア大学の学生たちは全く教科書を持っておらず、教授の講義をひたすらノートにとるといふ作業をしていたが、いまではこれら諸国の出版社にとって大学教科書は最大のマーケットのひとつである。

ところで、そうした大学教科書の出版に関わる東南アジア学術出版社の最大の問題のひとつは用語の選択である。



ジャカルタの露店書店街

インドネシアとマレーシアは強力な国語政策を実施し、教育の国語化を達成した。しかし、大学レベルの教育では完全国語化は

むずかしく、現実には英語が併用されている。とくに、国語化が難行しているフィリピンでは、大学における国語の影が薄い。筆者の国連大学に

おける元同僚ホセ・アブエバ氏は、自国に戻ってフィリピン国立大学の学長に就任してから、同学における教育の国語化を強力に推進したが、教員たちの抵抗にあって成功しなかった。教員たちは英語圏で教育・訓練を受けた人々であり、英語で考えることに馴れ、国語の用語開発が十分でないため、抽象的な表現に困難を感じるとあれば、抵抗するのわからないではない。

マレーシアでは国語のみによる教育を目ざしてマレーシア国民大学が設立されたが四半世紀たった今日では、英語

の教科書を用いた英語での講義が半分はあるらしい。一般に一国の高等教育の需要を満たすには、三〇四〇〇〇種の教科書が必要といわれる。マレーシアではデワン・バハサ（国立言語文学研究公社）の強力な国語教科書推進活動によって一九九〇年までに一二八六点が出版されたものの、その中には陳腐化するものがどんどん出るから、常に国語教科書不足状態が続いている。

大学教科書出版の第二の大問題は、その価格の高いことである。途上国では市民の収入に比べて書籍の価格が一般に高い。その度合を筆者は書籍への経済的アクセス率と呼んでいるが、日本に比べてその率は一〇倍も高いのである。すなわち一冊の本を購入するための経済的犠牲は日本人の一〇倍重いということで、大学教科書も例外ではない。書籍の価格レベルがこのように高くなる第一の理由は流通コストの大きいことであり、第二には競争的マーケットの成立が不十分なためである。

例えばインドネシアではオランダの経済学者キンマン氏が分析したように、広大な国土に孤立分散した小規模なバザール経済によって消費生活が行われ、そこでは価格競争によってでなく、なじみ客関係という経済外的要因によって、購入の意志決定が行われる。そのため資本主義的競争原理が十分に機能せず、企業の拡大・統合は水平的にでなく、垂直的に行われる。すなわち出版社は印刷から卸、小売まで、すべてを兼ねる傾向が強く、垂直的分業による専

門化、効率化が起こりにくいのだ。

大学教科書という、一定の販路を確保しうる出版でもこのようにむずかしい問題を抱えている東南アジア諸国だが、一方研究成果の伝達という、本来の意味での学術出版においてはその状況は一層厳しい。第一に著者たちは、研究成果を国内で出版するよりは欧米先進国の権威ある出版社から出版したいと考える。学術文献が普遍的な科学の世界を対象に書かれる以上当然の欲求だ。国内で出版すれば、たとえ英語で書かれたものでも海外への流通がうまくいかな



大書店チェーン、グヤン・アゴンの店頭

い。ましてや自国語で書いたら読者は国内に限られるし、国内に同じテーマに関心をもつ研究者がそれほど多くいるわけもない。というわけで、一次文献の意味での狭義の学術出版については、各国とも極めて厳しい状況にある。各国独自の文化的主張は西洋を中心とする

今日的文明（資本主義）の流れの中では、かぼそい存在として、漂うしかないのである。

こうした一般的な状況を背景に、それぞれの国で、学術出版の努力が営々として行われている。そうした動きを各国別に見てみよう。

フィリピン

大学教科書 一九八〇年代の前半に大学の急激な増設がとくに地方を中心に行われた結果、国立私立合わせて二〇〇校を越し、学生数一七〇万人を擁することになった。ノン・デグリーコースなどすべての形態の高等教育機関を合わせると一七七八機関にもなっている。初中レベルの教育でさえ国語の導入が必ずしもうまく浸透し得ていないフィリピンで、高等教育はほとんど全面的に英語に依存する状況にある。

自国産の大学教科書の準備は、大学教育を国語化したマレーシアに比べて大幅におくれている。英語を用いる限り、英米産の大学教科書との競争を避けられないからだ。自国の筆者による英語での大学教科書を出版する代わりにフィリピンで過去二〇年にわたって行われてきたのは大統領布告二八五号による強制許諾制である。輸入書が国内産に比べて不当に高価であるとき（発効当時で二〇ペソあるいは三・三ドル以上）、またリプリントや翻訳の権利を外国の原出版社が妥当な条件で与えないとき、政府が代わって強



アテネオ・デ・マニラ大学出版部で執務中のパチェコ部長

りない部分は輸入書に頼らざるをえない。アジア各国で作られる途上国向けの廉価版を主とする輸入大学教科書の使用は、国内産の教科書を量的に上廻っており、価格の低下を妨げる原因になっている。

学術書 アテネオ・デ・マニラ大学出版部のパチェコ部長は一九八六年現在でフィリピン学術出版機関がそれまでに出版した学術書の既刊点数を、大学出版部一四八八点（アテネオ・デ・マニラ大学八〇点、ラサル大学八八点、国立フィリピン大学六〇点）大学付置研究所八六六点、財団・政府機

制許可するもので、一九八七年までに、一八〇八点がこれによって出版された。

一九九〇年度における大学教科書の新刊点数は四三三三点であり、そのうち六〇点がりプリント版である。六〇点には強制許諾のものも通常の出版社間取引を通じたものも含まれている。国内生産で足

関二五〇点、出版社若干、計五〇〇点としている。^{*}年間ではない、七〇年代以後の累計である。一九九〇年代に入っても一年間の生産は大学出版部が二五五点、その他が二五五〇点にすぎないとパチェコ氏はとらえている。

フィリピンにおける学術書のマーケットは小さい。外国にはあまり売れない。主たる国内市場は国立・州立・町立図書館とその分館等、計四九〇館、専門図書館・大学図書館それに大学職員・研究所員といったところである。二〇〇〇部売り切るのに三〜五年かかるから完全に採算割れである。商業出版社は名声を高めるために赤字覚悟で時に学術書を出すのである。一九七二年以後の言語政策によって大学までバイリンガル教育が推進され、大学教科書から学術書まで国語で出版されることが増えているが、国語で出版すれば市場はますます狭くなり採算性が悪化するという矛盾をもっている。このような学術出版状況はフィリピンにおける学術研究の全般的低調を反映している。

大学や研究機関によって出版される学術雑誌については、パチェコ氏は前記論文末に定期的に継続発行されている主要学術雑誌三八誌をリストアップしている。もちろんこのほかに不規則的に発行される多くの学術雑誌があると思われるが、これら雑誌の市場は学術書籍の場合より一層小さく発行部数は平均して一誌当たり五〇〇冊程度であり収支はもろろん赤字である。

大学出版部 アテネオ・デ・マニラ大学出版部は、大学の業務部門のひとつとして一九七二年に設立されたもので、出版企画の決定は出版部理事会の権限である。目的はフィリピンに関する学術書、フィリピンの文学作品、そして一九五三年創刊の学術雑誌「フィリピン研究」の刊行である。同出版部は、著者たちに対してのみならず他の学術出版者に対しても、(1)高い基準の原稿の作成、(2)すぐれた造本、(3)販売促進と流通、についてのサービスを行っている。フィリピンにおける指導的立場にある学術出版者として、全国学術出版の質的向上に奉仕することを使命としているのである。

アテネオ・デ・マニラ大学出版部は現在年に一〇点程度の新刊を出しているが、一九九五年のカタログには一〇七点が収録されている。そのうち言語・文学四一点、社会科学五四点、哲学宗教四点、教科書八点である。

一九八三年に設立されたラサール大学出版部は一九九三年の一〇周年には、すでに既刊六六点をカタログに収載しており、内容は人文学、社会科学の諸領域にひろく分散している。出版内容が総花式となるのは総合大学の出版機関として避け難い。パチェコ氏の上記報告では創立直後のことで、わずか八点と記されているが、九三年までには六六点と順調に発展している。

まだ大学出版部となっていないが、フィリピン最古の大学サント・トマス大学には印刷部があって、学内の各種印

刷需要に応えるばかりでなく、教科書の出版に当たっている。一九七三年の設立というが、二五年間に出版された教科書は最盛期で一五〇点あったという。最近のカタログには九九点が記録されており、人文、社会、自然の各学科目の教科書である。

フィリピンで最も古く由緒ある大学出版部は、いうまでもなくフィリピン国立大学出版部である。一九六五年の設立で、印刷所をもち、その収益で出版部門を支持する体制になっているが、最近の活躍は地味であり、国際的にもあまりその姿が見えてこないのは、その経営組織体制と無縁ではないだろう。途上国の大学出版部によくある、大学教員の素人管理がいまも続いているのである。日本のように担がれるに甘んじて実質支配をしないという美風がなく、素人が必要な権力を行使するために発展が妨げられる例でなければ幸いである。

(神奈川大学教授・大学出版部協会顧問)

* Esther M. Pacheco "Academic Publishing in the Philippines" S. Gopinathan ed. "Academic publishing in ASEAN" Festival of Books Singapore 1986.

新業務システム導入の目的と役割

三浦 義博

はじめに

小会が導入したコンピュータシステムにはまだ正式な名称がない。とりあえず部内では「業務支援システム」と呼んでいる。

今年四月にサーバ一台とデスクトップ四台、ノートパソコン三台を導入し(商品管理センターにはサーバ一台とデスクトップ一台)、LAN環境のもと、各部署から上がってくる要望や個々の不備を調整しつつ、フル稼働を目指している現状である。

「コンピュータシステム」導入までの経緯

そもそも「コンピュータシステム」は一九九五年に、出版部長を中心に編集課・製作課・営業課・総務課計六名からなるコンピュータ委員会が設置され、東海大学出版会の現業務と将来展望にとって「何をどのようにシステム化するか」が議論されてきたものである。

システム導入の前提条件としてあったのは新刊の計画的な刊行とそれによる売上の増強であった。

一九九二年に始まる大学改革は、特に教科書を中心として小会の売上減少をもたらしたが、さらにその時期は、他の幾つかの要素が絡んで、東海大学出版会としての組織的な改善策を模索していた時期でもあった。いわば、危機感と必要性を背景としたシステム化である。

そして長い議論と検討の末に辿り着いたのが、以下に述べるシステムの構築であった。

「システム」の役割と流れ

基幹システムは「業務支援システム」と「製作発注システム」の二つから構成され、以下の三つの役割を基本とする。

① 書誌情報のデータベース化とその共有

新刊・重版・紀要のデータベース化された書誌情報を各課横断(編集課、製作課、営業課、総務課)で共有する。

② 共有されたデータに基づく各課の計画的な対応

共有された書誌情報に基づき、新刊・重版・紀要の計画刊行と販売企画の立案、また総務課の収支管理など、各課毎に計画的に対応する。

③ 事後データの蓄積とその活用・再利用

新刊データ、直販データ、著者データ等の様々な事後データを、販売予測、販売計画、重版計画、経営分析等に再利用する。

「システムの現状について」

「業務支援システム」「製作発注システム」の特徴は、各課間でデータを共有しつつ、単品毎の計画が立案されてゆくと言うことであるが、現在稼働している「業務支援システム」は、①販売管理システム ②印税管理システム ③システム管理であり、

「製作発注システム」は以下の処理機能を持つ。

【企画】

- ①企画書登録（企画書印刷） ②販売企画書入力（販売企画書印刷） ③著者カード登録（著者カード印刷）

【契約書】

- ①出版契約書印刷 ②重版発行承諾書発行

【個別発注】

- ①組指定登録 ②外注編集費登録 ③外注費当日発生一覧 ④外注費仕掛・製品一覧

【スケジュール】

- ①新刊進行スケジュール（新刊進行スケジュール表） ②重版進行スケジュール（重版進行スケジュール表）

【製作】

- ①製作見積入力 ②原価試算明細 ③製作発注入力 ④製造原価計画書

【照会】

- ①履修問い合わせ ②製造原価損益比較照会

「システムと課題」

現段階で上記のように、二〇の処理メニューが運用されている。今後この他に営業課の処理メニューが追加される予定である。

繰り返しになるが、企画登録された書誌情報が、各課の各処理メニューで呼び出され、最終的にはデータベース化されてゆくの、このシステムの最大の特徴といえる。

ところで、手元に一〇年前に東海大学出版会創立二五周年記念の一環として、部内の書類を一冊に纏めた冊子がある。それはA4判で三〇〇頁を越える。部内の各部署で、実に膨大な書類が日常的に行き交っている。これらの書類もだいぶ少なくなるが、だからといってコンピュータシステムがすべての問題を解決してくれるわけではない。

コンピュータシステムは運用すべきモノであり、企画立案・編集はどこまでいってもヒトの問題に関わる。編集者の熱意・拘り、努力に多くの部分を負うのであり、この根本的なところはコンピュータシステムの範疇外である。

編集者が悪戦苦闘の末に入稿した原稿を、いわば生産ラインに乗せてから、いかに効率的・計画的に書籍を生産・管理・販売してゆくか、つまり作業の合理化と標準化がシステムの目指すところである。（東海大学出版会）

マルチメディアの未来を体験

NTTインターコミュニケーション・センターを訪ねて

最近、NTTがアートとマルチメディアを融合した未来型ミュージアムを始めたといううわさを耳にした。しかし、名称も場所も全くわからず、とりあえず、最近始めたばかりのインターネットで調べてみることにした。

検索エンジンを使って「NTT」と入力してみると、それらしき項目が現れた。名称は「NTTインターコミュニケーション・センター（ICC）」らしい。自宅に居ながらにして様々な情報収集が即時にできるとは、なんとも便利な世の中になったものである。

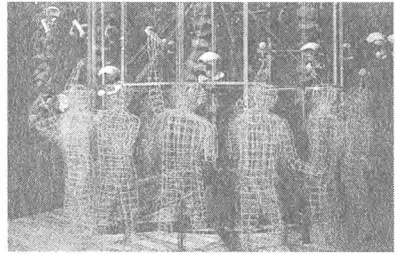
ICCのホームページは、さすが時代の最先端をいくNTTらしく、様々な趣向を凝らし、画像を豊富に取り入れたすばらしいものだった。ICCの概要、展示品の詳細な説明から、交通手段、料金まで、すべて詳しく掲載されていた。ホームページを見るだけでも、まるで現地を訪れたかのような気分になったが、それよりもぜひ訪問してみたという衝動にかられ、さっそく訪れることにした。

* * *

新宿から京王新線で一駅、初台駅の改札を出ると、ICCのあるオペラシテイタワーへは、まだ真新しい地下通路でつながっており、寒い冬でも雨にも濡れず快適に行くことができるようになっていく。

オペラシテイタワーには、新国立劇場、クラシック専用のコンサートホールなどがあり、他にショッピングエリア、オフィスエリア等に分かれている。まだできたばかりということもあり、休日は大勢の人でにぎわっている。

エスカレーターで4階へ上ると、すぐ目の前がICCの入口となっている。1階のにぎやかなショッピングエリアとは打って変わって、とても落ち着いた雰囲気のあるところである。ICCは「コミュニケーション」をテーマに、科学技術と芸術文化の対話を促進し、豊かな未来社会を構想していくことを目指したミュージアムということである。館内は、有料区域の「常設展示室」「企画展示室」等と、無料で利用できる「電子図書館」「ショップ/カフェ」等がある。



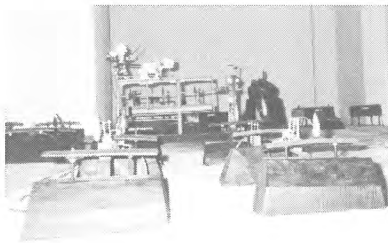
常設展示作品「ジャグラ」

常設展示室では、三次元ヴァーチャル・リアリティ・システムや無響室など、従来のミュージアムにはない環境を用いた体感型のインスタレーションをはじめ、国内外の作家によるメディア・アート、テクノロジ・アートの作品が展示されている。また、企画展示室ではジャンルを超えた多彩なプログラムを展開するための多目的スペースがあり、企画展のほか、個展、イベント、コンサートなども行っている。

5階にある常設展示室では、作品ごとにスペースが仕切られ、数名ごとに体験できるようにになっている。

「ライフ・スペイシーズ」という作品では、広いスペースの壁面に映し出された映像が、人の動きに反応し、人工生命体を生み出したり、動き出したりする映像が見られる。

また、「ジャグラー」という作品では、高速に回転する立体作品と周期的に点滅するストロボにより、闇の中であったかも人が動いているかのような立体アニメーションが描き出される。まさにアートとサイエンスを融合した未来型体感アートである。そのほかにも興味深い作品がいくつも展示されており、時間が経つのも忘れてしまうほどであった。



常設展示作品
「ガムラン・オブ・飲むニケーション」

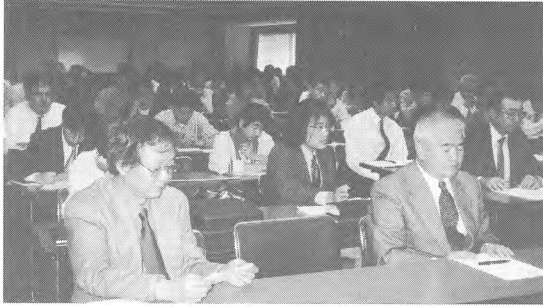
〒163-14 新宿区西新宿 3-20-2
東京オペラシティタワー 4F TEL. 0120-144199
開館時間 10:00~18:00 金曜日 21:00まで
(入館は閉館の30分前まで)
入場料 一般 800円 大学生・高校生 600円
中学生・小学生 400円
休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)
12月28日~1月4日 その他
交通案内 京王新線初台駅から徒歩1分
URL <http://www.ntticc.or.jp>

現在進行している情報革命が、科学技術や電子メディアの機能性の追求のみを重視していた(まるで冒頭の私のように)のに対し、今後は、技術と芸術の垣根が取り払われ、新しい段階に入りつつあることを実感した。

さらに、6階にある電子図書館では、パソコンにより、アート&サイエンスに関するさまざまな情報を入手することが可能となっており、作品を画像としてみることもできるようになっている。

私が訪れたのは平日で比較的すいていたにもかかわらず、すべての作品を興味深く体験し終えたころには、もうすでに日が暮れかけていた。数時間はいたことと思う。まさに芸術の秋にふさわしい充実したアーツイストイックな一日であった。

(産能大学出版社 新保秀樹)



第16回「編集者の集い」『電子図書館と出版の将来』
 図書館情報大学 石川徹也教授 講演会
 1997年11月11日 東京電機大学大会議室

▼『実践と相互人格性—ドイツ観念論における承認論の展開』（高田純著、A5判、本体六〇〇円）

今日、価値多様化のなか、他者との対話の問題が重要視されていることは論を待たないであろう。

本書は、対話思想の源泉を求めて、ドイツ観念論を、自己と他者との相互承認の展開という観点からとらえ直そうとする意欲作である。

従来、ドイツ観念論においては相互人格性の問題が欠如している—カントとフイヒテには他者論が不在であり、ヘーゲルには個人論が不在であるとの解釈がなされてきた（ハーバーマスなど）。

著者は、カントの自律論に含まれる意志の自発性と共同性の要素が、フイヒテとヘーゲルにおいて分化し、交差しつつダイナミックに展開される過程で、それぞれ独自の実践哲学を確立したことを明らかにし、これをつうじて従来の解釈の克服をめざそうとする。個人の自発性と共同性との関係の問題は現代思想においてもまだ決着がつかずますます鋭く問われているといえよう。

▼山田園子『イギリス革命とアルミニウム主義』（本体価格五八〇〇円）

イギリス革命期の急進的聖職者ジョン・グッドウインは「しよく罪されたしよく罪」（一六五一年）において、カルヴァンの運命論的な二重予定説を批判し、神の選びは万人に及びその摂理は人間の自由意志と矛盾しないと説いた。このアルミニウム主義の教説が、イギリス革命に及ぼした影響を詳説する。グッドウインは、聖職者として宗教上の論争に加わったのみならず、議党派やクロムウェルの政策を支持、革命期の政治動向に大きな影響を与えた。しかし彼の宗教的自由論や教会制度論は、長老派、独立派、一部の急進派とも対立し、これがイギリス革命の文脈内で、力関係を一層複雑にした。なお、しよく罪とはキリストが罪人のために十字架の上に犠牲になったことをさす。著者は現在、広島大学法学部教授。本書刊行にあたり、平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。

慶應義塾大学出版会

…ニュータイプ学会誌創刊

▼『KEIO SFC REVIEW』

(慶應義塾大学湘南藤沢学会発行、一四二九円、年二回(十一月・四月)発行)新しい大学像をつくりつつある湘南藤沢キャンパス(SFC)がその知の成果を広く社会へと情報発信するために発刊。創刊号の特集は、「デジタルユニバーシティからデジタル社会へ」。

…学術書の新刊六点をご案内します。

▼『リコーナ博士の こころの教育論』

(トーマス・リコーナ著、三浦正訳、四八〇〇円)は自己と他者に対する「尊重」と「責任」を柱とした学校教育を提唱。

▼『環境コミュニケーション論』(藤江俊彦著、二六〇〇円)は、人間と環境を総合的にとらえる新分野の入門書。

▼『先物・オプション市場の計量分析』

(岩田暁一編、三四〇〇円)、『実証経済分析の基礎』(中島隆信・吉岡完治編著、三四〇〇円)は新シリーズ、慶應義塾大学産業研究所叢書。『ハイブリッド・キャピタリズム』(藤森三男他著、二二〇〇円)、『アジアの物流』(二二〇〇円)は共に地域研究センターの研究成果。

産能大学出版部

▼『1-2-3会計—Windows版Lotus

1-2-3によるパソコン会計(フロッピー・ディスク付)』(谷田英男著、三八〇〇円)

いまやウィンドウズ・パソコンはオフィスになくてはならない必需品です。このパソコンに付属のLotus1-2-3(Windows 95版)を使って出納帳から試算表、総勘定元帳までのすべてを専用会計ソフトと同じように処理できるシステム、それが「1-2-3会計」です。もちろん、消費税5%にも対応、ユーザーに合わせたカスタマイズも簡単に行えます。すべてをマクロで組んでありますので、Lotus1-2-3の知識がない人でも自在に使えます。もう市販の会計ソフトは不要の時代、あなたの会社に合わせて自由に使いこなせるロータスファイルのすべてを収録してあります。



専修大学出版局

▼大庭健、山崎カヲル他編、佐倉統、落合恵子他著『5巻 ゆらぎ』(二八〇〇円)

シリーズ最終巻である本書では、これまで固定的なものと考えられてきた性の規範や区別が「ゆらぎ」を見せている今日の状況のなかで、これまで性の「逸脱」や「異常」と考えられてきた事柄を捉え直す試みを行う。1章ではサルなどの生物の生態を手がかりに人間の異常の意味を明らかにしようとする。2章では書き継がれた手紙という形式で性暴力の起こるメカニズムや実態を告発する。

3章では性転換や同性愛、異性装といった越境する性の諸相を解明する。5章ではエイズ問題に見られる同性愛者の差別の現状を取りあげ、カミングアウトの戦略を提示する。

▼大庭健を中心に企画立案以来三年余、鷺田清一他一流の執筆陣を擁して推められた「シリーズ性を問う」が、5巻刊行をもって完結することとなりました。

その問性をめぐる論議は世間においてもかまびすしかったですが、今後も様々な問題を投げかけるテーマである。本シリーズがその指針となればと思う。

玉川大学出版部

▼吉家定夫著『日本国学監・ディビッド・マレー』(四三〇〇円)

マレーは明治期に日本に招聘され文部卿の最高顧問「学監」に就任、教育博物館、東京大学、東京学士会院などの創設に尽力した人物である。文部省による集権的画一的行政指導、教科書統制、試験の重視、公立学校教員の管理など、彼の影響を抜きにして語ることはできない。

▼梅若万紀夫監修『梅若万三郎家 能面手鑑―橘之巻・梅之巻―』(七〇〇〇円)

観世流・梅若家に伝わる四百を越える能面のなかから、優品二百余点を精選した、かつてない収録数を誇る写真集。面打ちの特徴と時代を語る面裏の写真も掲載し、舞台姿も収録する(分売不可)。



中央大学出版部

▼白羽祐三『日本法理研究会』の分析』(本体五七〇〇円)

「日本法理研究会」の法思想は戦時中の「大東亜聖戦論」に基礎をおくものであるが、「聖戦論」そのものは今日でも生き残り活火山の如く時に噴火をこころみている。最近の保守的政治家はまるで南京大虐殺、朝鮮の植民地化や朝鮮人・中国人の「強制連行」などはなかったと主張する。事実それを否定する発言が公人によって公然となされている。そのねらいは当時の国際法違反の戦争犯罪および天皇制政府の責任の免罪にある。

これらを支援・激励しているのは周知の如く日本遺族会、「純正右翼」、また神社本庁などの宗教団体などであり、これらの集合体として「日本を守る国民会議」・「日本を守る会」が存在している。これら保守団体の「大東亜聖戦論」は戦時中の「日本法理論研究会」の法道一如論の中にその連続性を見いだすことができる。しかし現在にいたるも、何故かこの研究会が主張していた法思想・その全貌が解明されたいえない。本書がこの解明の先鞭となればと思っている。

東海大学出版会

▼『貝のミラクル』(奥谷喬司編著、A5変形判、本体二五〇〇円)

貝と人とのかわりかはるか昔から続いている。殻の大きさが一ミリに満たない微小貝から一メートルを優に越えるアコヤガイと、貝は、この地球上に現在一二万種が知られる。岩場にびたりと張り付いている笠貝は、満潮になれば水中に没し、潮が引くと太陽にさらされる。その笠貝の餌取り出勤時間は、乾いた岩に波しぶきがかかるのを察して出掛け、好物の藻類を食べる。イモガイの仲間も、人も死にさらす。一方、船底の塗料から溶け出す内分必かく乱物質によってメスなのにオスのペニスを持つイボニシの出現(インボセックス)は新たな海洋汚染に警鐘をならす。「時差出勤のミラクル」「牡蠣は黙って進化する」「左巻き右巻きのミラクル」「インボセックスによる貝類絶滅の危機」など、十八人の第一線の研究者が十八のテーマで思う存分に読者を貝のミラクル世界に引き寄せ満足させてくれる。

東京大学出版会

二〇世紀もその終わりを間近に控えて、われわれの時代の意味がさまざまに問い直されている。今世紀は「世界戦争」と社会主義の成立によって幕を開け、アメリカ的な国内・国際秩序の確立とその国際的伝播、すなわち構想・設計された「世界秩序」の構造化の歴史であった。東京大学社会科学研究所編『20世紀システム』（全六巻）（一九九八年一月より隔月刊）は、そうした「世界戦争」と「世界秩序」、そして「経済成長」の世紀と特徴づけられるこの時代を、総花的に捉えるのではなく、三つの「世界戦争」を経験するなかで、世界システムの深部においてダイナミックに変化する多様なサブ・システム（国民国家、国際機関、地域、企業等）の動態をつかまえる視点を数多く提供する。シリーズの構成は以下のとおり。①構想と形成 ②経済成長Ⅰ―基軸 ③経済成長Ⅱ―受容と対抗 ④開発主義 ⑤国家の多様性と市場 ⑥機能と変容。急速な情報通信革命・グローバル化・シオンのなかで、大きなシステムの変容が進行しているこの世紀末に立つわれわれが今、問うべき課題はなにか。二一世紀に解決すべき問題を浮上させるためにも、本シリーズの分析を手掛かりに、多くの読者とともに「二〇世紀」という時代を正面から見据えていきたい。

東京電機大学出版局

▼日本鋼構造協会編 構造物の耐風工学
構造物に対する風的作用が重要視され、これが本格的に工学上の問題となったのは、十九世紀の末、パリのエッフェル塔が建てられた頃のことである。当時は風を単なる空気の一様な動きとみなし、学問的には単純な問題として捉えていた。近年になって大規模で高い構造物が多く造られるようになり、風の乱れ的作用や、風による構造物の振動が研究の対象とされ、「風工学」が大いに発達した。

本書は、我が国の風工学界で中心的な動きをしている土木、建築、電力、気象等各分野の精鋭が、基礎から応用までの広範な話題をまとめたものである。この分野の教育・研究に携わる方々のみならず、設計実務者にとっても有用であり、ぜひ座右に置いて欲しい一冊である。



本体13,000円（税別）
B5判・706頁・箱入り
上製

東京農業大学出版会

▼『動物の生態と保護』 田村正人
（本体一〇〇〇円）
かけがえない地球の環境を守らなければならぬ、と最近よく言われる。しかし、それは人間の立場からみた一方的な考え方もかもしれない。動物・植物・人間と地球上の生物が共存して、初めて環境保全は成り立つのであろう。

この著書は、動物の誕生と繁栄から始まり、動物の衰退と滅亡、環境・行動・社会・保護論など、動物についての幅広い知識をまとめたものである。単に言葉だけで、環境保全をとらえるだけでなく、動物についての理解を深めることは、今後の環境保全を考える上でも、たいへん重要になってくるであろう。



法政大学出版局

▼W・シヴェルブッシュ著／小川さくえ訳
『光と影のドラマトゥルギー』

A5判上製・図版五百余点／三八〇〇円
本書が扱う対象は、十九世紀末以降に隆盛を見た電気照明であり、狭くはその技術史である。ネルンスト灯、フィラメント、間接照明、蛍光管などがつぎつぎと丹念に記述されていく。技術史である以上、個々の歴史的データや技術的要点を正確に追っていることは言うまでもない。しかしながら本書の真骨頂はここではない。技術というディテールから語り起こしながら、真にテーマとしているのは、それら技術のひとつひとつが開示する「人間の知覚の変容の諸相」とその文化的コンテキストである。

週刊読書人・原克氏評

本書は、…人工的な照明をさまざまな角度から紹介。多くの写真とともに、エピソードや裏話なども織り込み、「光と闇の織りなすドラマ」仕立てになっていて興味深い。…著者は、電気の光が実はろうそくやランプの炎の魔術よりもいっそう刺激的な魔力を秘めていることを説き明かしている。
エコノミスト評

放送大学教育振興会

▼放送大学は、平成十年一月二十一日からCSデジタル放送による全国放送を開始する。また平成十年度第二学期（十月）から、全国で全科履修生（卒業を目指す学生）を募集する。これによって放送大学の「全国化」のますますの前進が期待される。

▼平成十年三月刊行予定の放送大学印刷教材（開設改訂科目）六十七点の編集作業は、今たけなわ。主任講師・分担執筆者約二五〇名、編集担当者約四〇名が、資料収集・原稿執筆、原稿回付・校正にと、大わらわの毎日である。

▼放送大学では新たな社会的ニーズに対応するため、資格取得に資する科目、職場研修に資する科目など、リフレッシュ教育等に資する科目を開設することになった。その第一弾として平成十年度から、「学校図書館司書教諭の資格取得に資する科目」の開設に向けて準備を進める。
▼放送大学教育振興会では、昨年に引き続いて『一九九八 ジャンル別目録 放送大学テキスト』①人文系・外国語、②社会系・外国語、③自然系・外国語、の三分冊を作成。全点全章見出し付き。

明星大学出版部

▼山田昭廣著『Thomas Creed Printer to Shakespeare and His Contemporaries』一九九四年刊が、第一回ゲスナー賞の「本の本部門」銀賞に輝いた。
改めて本書を紹介すると、平成五年度文部省科学研究費の補助によって刊行された書物である。

第一部はクリード印刷所の全体像を総合的に考察、親方印刷者クリードに関する事業実績を逐年的に解明、一六〇〇年のロンドン印刷業者たちの地理的観察や、共同印刷の実態を究明している。第二部では、エリザベス時代の戯曲本確立のための規範づくりを分析書誌学的方法によりとらえている。第三部では、補遺の形をとった五章からなり、新しい知見と発見の断片を収録してある。

▼高島秀樹著『教育調査―教育の科学的認識をめざして―』

本書は、大学の学部段階での講義のテキストとして利用するように作られているが、教育調査の標準的な方法と技術を明らかにすることを目的としている。

早稲田大学出版部

▼『現代テレビ放送文化論』（渡辺みどり、二五〇〇円）テレビ報道はどうあるべきか。企画・制作、視聴率、放送基準などを例に、番組が作られ、放送されるまでを現場の声を取り入れて語る。

▼〈シリーズ高齢社会とエイジング〉の刊行を開始した。エイジング（加齢）をキーワードに高齢社会を総合的にとらえる新シリーズ。第一回配本は、①「エイジングとは何か―高齢社会の生き方」（浜口晴彦編、二五〇〇円）、②「高齢社会の法律」（佐藤進編、二五〇〇円）の二冊。前者は、医療・福祉・介護などの実態を検証し、高齢社会への対策を考える。後者は、年金や介護保険の仕組み、遺言・相続の方法などを分かりやすく解説し、高齢社会に不可欠な法知識を紹介する。



名古屋大学出版会

▼梶川伸一著『飢餓の革命―ロシア十月革命と農民―』（二二〇〇円）ポリシェヴィキ権力と農民、都市プロレタリアと農民の矛盾・対抗関係を、全国に波及した飢餓に焦点を合わせて実証した力作。

▼松野修著『近代日本の公民教育―教科書の中の自由・法・競争―』（五七〇〇円）市民社会の原理はいかに教えられてきたのか。自然権論を基調とする公民教育の営みとその逸脱のありようを照射。

▼森川英正・由井常彦編『国際比較・国際関係の経営史』（六〇〇〇円）国際比較、国際関係を背景とした企業経営史へとその領域を拡大する経営史研究の新しい方向を一望するべく編まれた論集。

▼原一夫・大橋勝著『メランノサイト病変―病理組織の見方と鑑別診断―』（八〇〇〇円）ほくろの癌の病理診断は時には死の宣告となる。本書では多くの症例写真を用いて診断のポイントを詳述。

▼稲賀繁美著『絵画の黄昏―エドゥアール・マネ没後の闘争―』（四八〇〇円）批評・美学と政治学が交錯する地点で「近代芸術」の成り立ち自体を問い直す。第一九回サントリー学芸賞受賞。

京都大学学術出版会

▼『近代ドイツの農村社会と農業労働者―土着と〈他所者〉のあいだ―』足立芳宏著／近代ドイツ農村における「他所者」（季節・外国人労働者）と「土着者」（大農・小農民等）の間の、文化的・経済的葛藤に注目し、ファシズムが農村へ浸透したメカニズムを明らかにする。生き生きとした史料紹介と綿密な分析による、農村ファシズム論の新しい展開。

▼『英詩の文体論批評―イエイツ、ライキンを中心に―』宮内弘著／テキスト問の関わり（codition 結合）と文体に注目して、英詩を読み解く。テキストをあまりに細分化する構造主義的文体批評を脱し、〈作品鑑賞〉と〈テキスト分析〉双方の要素を併せ持った、綿密かつ何人にも魅力ある文芸批評の方法を示す。

▼『アフリカ農業の諸問題』高村泰雄・重田眞義編著／旱魃、内戦、飢餓が伝えられるアフリカの食糧生産は果たして本当に不安定なのだろうか。独自の文化や巧みな在来農法を育んできたアフリカの豊かな大地に生きる人々の生産の営みを多面的に捉え、アフリカが直面する農業の問題点を解決する糸口を探る。

大阪経済法科大学出版部

▼平井正文著『転換期の地域経済・社会』(経済研究所研究双書3)(定価二六〇〇円) 日本経済社会の「光と影」がうずまいた六〇〇〜八〇年代は、かつて日本国民が経験したことのない歴史的試練の時代であった。本書は、その「影」の部分にスポットを当てつつ、それがもたらすところの地域経済の変貌について、農山村、協同組合に重点をおいた追求、分析を行ったもの。▼星川順一著『マクロ経済学』(定価二五〇〇円) 学生向けテキストである。ケインズ、ヒックスのIS-LM分析から始める。成長の安定性に関してケインズ派と新古典派との意見の相違はあるが、均衡成長経路に関しては、労働を効率単位で測る(宇沢モデル)ならば、両学派の相違は無くなる。諸理論の共通領域を求めた。制度部門貯蓄投資につき国内不均衡を如何なる方向に解決するのが、無資源の日本経済にとって望ましいかを考える。為に、貿易理論の考察が必要である。近年一般政府支払(特に社会保障基金)の増加が著しい。情報非対称性と市場に関して、社会制度が発生する理由を考察する。

関西大学出版部

▼ディーター・ブローイアー著、浜本隆志・宇佐美幸彦・芳原政弘共訳『ドイツの文芸検閲史』(五〇〇〇円) 神聖ローマ帝国から東西ドイツ時代に至るおよそ六百年間にわたる文芸の検閲史は、作家と当局との葛藤の歴史であるだけでなく、各時代における政治的・社会的状況らびに出版メディアの変遷と当局の法的規制の関係なども映し出す。したがって本書は、文学史のみならず、社会思想史や法制史、ドイツ史の研究などにも大いに寄与するであろう。

▼大庭脩編『江戸時代の日中関係史料』(蘭園鶏肋集)(八〇〇〇円) 編者は常に江戸時代の資料を活字化し、学界共有のものにすべきであるとして主張している。本書に収録した史料の大半は、編者の所蔵する唐蛮貨物帳の離れや唐方俵物絵図などの貿易資料、市橋長昭の蔵書目録、泉屋吉兵衛や所有者不明の値段付唐本目録、銚子や対馬に漂着した唐船資料などである。これらの史料が公表されることで、より一層日中関係史の研究が進展することを編者は期待している。

九州大学出版部

▼稲葉継雄著『旧韓末「日語学校」の研究』(A5判・五三〇頁・一三〇〇〇円)。日清戦争から韓国併合にかけての旧韓末期に生成した「日語学校」の実態に迫った本書は、従来明らかでなかった近代日韓教育交流史の一角を照らし出す。

▼新谷恭明著『尋常中学校の成立』(A5判・三七〇頁・七〇〇〇円)。本書は福岡県域を対象として、尋常中学校の成立にいたる過程を藩校や私塾の教育からの高等普通教育を求めめる心性に導かれたものとして理解し、近代日本における中等教育成立の史的構造を説明する。

▼竹熊尚夫著『マレーシアの民族教育制度研究』(A5判・二〇〇頁・四二〇〇円)。多民族社会マレーシアで、現在展開されているマレー系中国系それぞれの民族コミュニティと教育制度との関係を検討し、教育を通して国家と民族との関わりを考察。一国内での多様な民族教育のあり方が問い直されている。

▼島袋敬一編著『琉球列島維管束植物集覧』改訂版(B5判・八六〇頁・一八〇〇〇円)。琉球列島の植物学名の考訂。異名、出典を列挙。三五〇部限定出版。

東北大学出版会

「難産だった。流産が切迫した時もあったが、ともかく、無事、母子共に健やかに経過している」とは『宙』おおぞらに輝く北斗の七つ星に寄せて、東北大学出版会が読書人に贈る会報の創刊号にある。その『宙』も二号目が誕生した。処女作

▼『聴覚と言語の世界』（永渕正昭著、二五〇〇円）は好評で増刷をした。お調子にのって、読者に知の世界をコンパクトにまとめて提供する叢書の刊行をはじめめた。これも好評である。二冊を紹介。

▼TUP書① 西村貞二『歴史学の遠近』（二六〇〇円） 歴史家である著者が歴史とは何かについて、その見方、歴史書の読み方、歴史家の姿勢等の視点から長年に亘る思索の跡をまとめた。

▼TUP書② 梅本達郎『放浪文学論―ジャン・ジュネの余白に』（一六〇〇円） 人生において放浪とは。著者は、出発点をもたず、到達点をもたぬことと定義。どこから来たのか分からず、ひたすら通過することだと。はたして人間において「放浪者」がいるのであろうか。

▼高橋滯子『心の科学史―実験心理学の誕生』（五〇〇〇円）は年内刊行予定。

流通経済大学出版会

▼角本良平著『交通学・一三〇年の系譜と展望―二世紀に学ぶ人のために』（五〇〇〇円、平成十年一月発行予定）

社会科学は本来人間を研究対象とする学問である。その方法として人間の営みの一つである生産、交換、消費そして分配という過程を分析研究して、経済活動をとおして人間に近づこうとする学問もあれば政治、芸術あるいは宗教など文化諸領域での人間の営みを分析研究して人間の本質に至らんとする学問もある。しかし、近年の社会科学全体の動向を見渡して見ると、それぞれの学問領域での細分化が進み理論は精ちになっていくが本来の研究対象である人間の姿が次第に見えなくなっているように思える。

本書では交通学においても同じような現象が見られるというのである。第一部では、このことを福沢諭吉の『民情一新』を源流とするわが国交通学一三〇年の系譜をたどり主要な学説をとりあげ論証しており、第二部で交通学が二世紀に生き残るための再構築の必要性和その方向即ち、知識学あるいは類型学として再生を提言している。

大阪大学出版会

▼全史料協監修『文書館用語集』B6・一七二頁・一五〇〇円/最新刊。

ローマではタブラリウムという公文書館がすでに紀元前からあった。その建物の一部は現在も市庁舎の土台として使われている。記録資料を文化遺産として将来に残し利用に供する文書館活動が日本でもっと広がることを願って。

▼大型企画の労作・一月刊

柏原士郎・上野淳・森田孝夫編著『阪神・淡路大震災における避難所の研究』

B5・三四〇頁・七〇〇〇円

鬼原俊枝著『幽微の探究―狩野探幽論』

B5・（本文篇＋図版篇）二分冊函入り・一五〇〇〇円

▼今年2点、出版物に与えられる賞を受けた。誕生間もない出版会としては非常に名誉なことで、報告申し上げたい。

商工総合研究所「平成8年度中小企業研究奨励賞」経営部門本賞：竹内常善・阿部武司・沢井実編『近代日本における企業家の諸系譜』

日刊工業新聞「平成9年度技術・科学図書文化賞」優秀賞：大阪大学基礎工学部編『自然のしくみと人間の知恵』

新刊案内 '97・10 / '97・12

■北海道大学図書刊行会

一般利潤率の傾向的低下の法則 平石 修 七〇〇〇円
 エキノコックス(増補版)―その正体と対策―

今日の輸血

山下次郎/神谷正男増補 二八〇〇円
 関口定美監修/霜山龍志 一五〇〇円

雪と水の科学者・中谷宇吉郎
 Circumpolar Animism and Shamanism

東 晃 二八〇〇円
 山田孝子・煎本孝編著 一八〇〇円

■聖学院大学出版会

イギリス革命とアルミニウム主義 山田 園子 五八〇〇円

■慶應義塾大学出版会

環境コミュニケーション論

藤江 俊彦 二六〇〇円

リコーナ博士の ころろの教育論―〈尊重〉と〈責任〉を育む学校
 環境の創造― トーマス・リコーナ/三浦正訳 四八〇〇円

経済史入門―現在と過去を結ぶもの― 岡田 泰男 三六〇〇円
 先物・オプション市場の計量分析(慶應義塾大学産業研究所叢書)

実証経済分析の基礎(慶應義塾大学産業研究所叢書) 岩田暁一編 三四〇〇円
 中島隆信/吉岡完治編 三四〇〇円

ハイブリッド・キャピタリズム―東アジアの「和魂洋才」型発展―
 (慶應義塾大学地域研究センター叢書)

藤森三男/神原貞雄/佐藤和編 二二〇〇円
 ケインズ経済学とその理念 千種 義人 三八〇〇円

■社会保障の発展構造(慶應義塾大学商学会商学研究叢書19)

アジアの物流―現状と課題― 藤澤 益夫 三八〇〇円

デジタルメディア革命―21世紀の人間/社会/教育 二〇〇〇円
 KEIO SFC REVIEW No.1

慶應義塾大学湘南藤沢学会編 一四二九円

■産能大学出版部

建設VE実戦マニュアル 秋山 兼夫 二二〇〇円

自分を見失わないで生きる 国司 義彦 一五〇〇円
 1-2-3会計(Windows 95版) 谷田 英男 三八〇〇円

高品位サービス最新線 山口 弘明 一六〇〇円
 素直な心を持った21世紀の経営者 藤木二三男 一五〇〇円

仕事は私事で面白い 篠田 修 一六〇〇円
 会計ビッグバン・連結重視で株価がわかる嶋田 浩至 一六〇〇円

情報革命と経営革新 J・マッケニー/藤田忠・前田雅弘共訳 二八〇〇円

グローバル物流戦略 和多田作一郎 二〇〇〇円
 絶対営業力 青木 仁志 一五〇〇円

わかるネットワーク 平山 由美 一五〇〇円
 現代広告コテンパン 新広告はこちらだ 山田 理英 二二〇〇円

倒産しない資金繰りの実務 市川 利夫 一八〇〇円

■専修大学出版局
シリーズ性を問う5〈へゆらぎ〉
民法総則〔新装版〕
大庭健他編 二八〇〇円
菱木昭八朗・宮岡孝之 一七〇〇円

■玉川大学出版部
ドイツ精神史―ゲッチンゲン大学講義―

H・ノール／島田四郎監訳 五六〇〇円
大学開発の担い手―デイベロップメント・オフィサー―
M・ワース、J・W・アズプⅡ／山田礼子訳 二五〇〇円

創造的才能教育 二八〇〇円
麻生誠・岩永雅也編 五〇〇〇円

異文化間教育研究入門 二四〇〇円
聖書のなかの女性たち 二四〇〇円
村上 良夫 二四〇〇円

聖書を読む―国際文化理解のために―
ドイツの高等教育システム
H・バイザート他／訳者代表 小松親次郎・長島啓記 五五〇〇円

梅若万三郎家 能面手鑑―橋之巻・梅之巻―
梅若万紀夫監修 七〇〇〇円
館 昭 二八〇〇円

大学改革 日本とアメリカ
梅若万紀夫監修 七〇〇〇円
館 昭 二八〇〇円

■中央大学出版部
「日本法理研究会」の分析―法と道徳の一体化―
白羽 祐三 五七〇〇円

■東海大学出版会
現代の人間観と世界観
―21世紀のために、基本から考えたいひとのために―
増成 隆士 一八〇〇円

固体電子論の基礎 小泉義晴・高橋宣明 二二〇〇円
ヒマラヤの自然誌―ヒマラヤから日本列島を遠望する―
酒井治孝編著 二〇〇〇円

貝のミラクル―軟体動物の最新学― 奥谷喬司編著 二五〇〇円
イブセン戯曲選集―現代劇全作品― 毛利三彌訳 六〇〇〇円
野生動物からのメッセージ―バイオテレメトリ研究余話―
相馬 正樹 二四〇〇円

植物工場ハンドブック 高辻正基編 八〇〇〇円

■東京大学出版会
現代幸福論〈東京大学公開講座65〉
ネットワーキング・コミュニティ
池田謙一 二八〇〇円
三三〇〇円

江戸の植物学 大場 秀章 二六〇〇円
東アジアの王権と思想 渡辺 浩 三四〇〇円

日本企業の意思決定原理 高橋 伸夫 三八〇〇円
経済と組織の社会学理論 富永 健一 二五〇〇円

見る脳―描く脳―絵画のニューロサイエンス―
岩田 誠 二六〇〇円

神経堤細胞―脊椎動物のボディプランを支えるもの―
倉谷滋・大隅典子 一八〇〇円
〈UPバイオロジー97〉

東京大学史料編纂所写真帳目録〔索引〕 八〇〇〇円
帝国会貴族院委員会速記録 昭和篇93 東京大学史料編纂所編

帝国会衆議院委員会議録 昭和篇129 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円
大日本史料 第十二編之二十九 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

大日本古文书 家わけ第十八 東京大学史料編纂所編 一五〇〇〇円
ドラキュラの世紀末―ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究― 丹治 愛 二四〇〇円

近世身分制と周縁社会 塚田 孝 五五〇〇円

丘のうえの民主政—古代アテネの実験— 橋場 弦 二八〇〇円
 史記戦国史料の研究 藤田 勝久 一五〇〇〇円
 文化心理学—理論と実証—

柏木恵子・北山忍・東洋編 四五〇〇円
 自己注目と抑うつつ社会心理学 坂本 真士 三五〇〇円
 刑法 木村 光江 三二〇〇円

ロシア現代政治 下斗米伸夫 二五〇〇円
 ポリネシア—海と空のはざま— 片山 一道 二六〇〇円
 サメの自然史 谷内 透 四二〇〇円

東京大学歴代総長式辞告辞集 昭和篇94 八〇〇〇円
 帝国議会貴族院委員会速記録 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録 昭和篇130 一七〇〇〇円
 国立国会図書館所蔵 一五〇〇〇円
 大日本史料 第十二編之三十一 東京大学史料編纂所編 一一〇〇〇円

大日本古文书 家わけ第十八 東大寺文書之二 二二〇〇円
 大日本古文书 家わけ第十八 東京大学史料編纂所編 一一〇〇〇円

日本語の歴史 山口明穂・鈴木英夫・坂梨隆三・月本雅幸 二四〇〇円
 臨床心理学研究の理論と実際 —ステューデント・アパシー研究を例として—

政治の成立 下山 晴彦 六八〇〇円
 ASSEANパワー—アジア太平洋の中核へ— 木庭 顕 一〇〇〇〇円

生物系統学 山影 進 五八〇〇円
 火山噴火と災害 三井 信宏 五六〇〇円
 観測的宇宙論 宇井 忠英 三七〇〇円

増補 日本らしい史 池内 了 三六〇〇円
 山本 俊一 八八〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇95 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円
 帝国議会衆議院委員会議録 昭和篇131 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

大日本史料 第十二編之三十一 東京大学史料編纂所編 一五〇〇〇円
 大日本古文书 家わけ第十八 東大寺文書之三 東京大学史料編纂所編 一二〇〇〇円

東京電機大学出版社 学生のためのWord&Excel 若山芳三郎 一八〇〇円
 学生のためのWord 若山芳三郎 一五〇〇円
 学生のためのWord X.500ディレクトリ入門 荒川 幸式 二四〇〇円

システムアナリスト試験問題集 午前 大山実 他 二八〇〇円
 Mathematics による材料力学 小峯 龍男 二九〇〇円
 ギガビット時代のLANテキスト 日本ユニシス情報技術研究会編 二八〇〇円

構造物の耐風工学 日本鋼構造協会編 一三〇〇〇円
 ウェーブレット応用—信号解析のための数学的手法— 田村 正人 一〇〇〇円

東京農業大学出版社 動物の生態と保護 有岡 利幸 二七〇〇円

法政大学出版社 松茸へものと人間の文化史84 有岡 利幸 二七〇〇円
 秘密と公開 S・ボク／大澤正道 四七〇〇円
 知られざるワグナー 三光 長治 三八〇〇円
 生きられる哲学—生活世界の現象学と批判理論の思考形式— 三二〇〇円

F・フェルマン／堀栄造 三二〇〇円

カントの方法―思惟の究極を求めて― 荻木 栄夫 四七〇〇円
小集団の時代―大衆社会における個人主義の衰退― M・マフエゾリ／古田幸男訳 三六〇〇円

夢の神話学 井本 英一 二八〇〇円
久保栄『火山灰地』を読む 吉田 一 六〇〇〇円
このようなことが起こり始めたなら…

R・ジラル／小池健男訳 二五〇〇円
中国国民革命―戦間期東アジアの激動―

折木利夫・坂野良吉 四七〇〇円
時間と社会理論 B・アダム／伊藤誓・磯山甚一訳 三七〇〇円

宗教の共生―フランスの非宗教性の視点から― J・コスタリラスカー／林瑞枝訳 一八〇〇円

啓蒙のユートピア〈Ⅲ〉 野沢協・植田祐次監修 二二〇〇〇円
絵画における真理〈上〉

J・デリダ／高橋允昭・阿部宏慈訳 三四〇〇円
シオラン S・ジヨドー／金井裕訳 二三〇〇円

懐疑的省察ABC E・シャルガフ／山本尤・伊藤富雄訳 二八〇〇円
フランスの悲劇 T・トドロフ／大谷尚文訳 三三〇〇円

放送大学教育振興会

明星大学出版部

早稲田大学出版部

現代テレビ放送文化論 渡辺みどり 二五〇〇円
キリスト教は如何にしてローマに広まったか(新装版)

霜田美樹雄 三八〇〇円
イギリスの陪審裁判―回想のアダムズ医師事件―(新装版)

パトリック・デブリン、内田一郎訳 四六〇〇円

早稲田ラグビー史の研究―全記録の復元と考察― 日比野 弘 一五〇〇〇円
平和研究 第22号―地球市民社会の安全保障― 日本平和学会編 三二〇〇円

スポーツの権利性と文化性(日本スポーツ法学会年報第4号) 日本スポーツ法学会編 四五〇〇円

シリーズ高齢社会とエイジング(全8巻) 第1回配本/第1・2巻 エイジングとは何か―高齢社会の生き方― 浜口晴彦編 二五〇〇円

高齢社会の法律 佐藤 進編 二五〇〇円
叢書 ワセダ・リブリ・ムンディ

②⑤ イギリスの社会―「開かれた階級社会」をめざして― ポール・スノードン、大竹正次 二九〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇(全18巻) 第16回配本/第14巻 遠西独度涅烏斯草木譜 Ⅲ 杉本つとむ編 三二〇〇〇円

名古屋大学出版会

飢餓の革命―ロシア十月革命と農民― 梶川 伸一 一二〇〇〇円
国際比較・国際関係の経営史 森川英正・由井常彦編 六〇〇〇円

メラノサイト病変―病理組織の見方と鑑別診断― 原一夫・大橋勝 八〇〇〇円

近代日本の公民教育―教科書の中の自由・法・競争― 松野 修 五七〇〇円

京都大学学術出版会

近代ドイツの農村社会と農業労働者 ―〈土着〉と〈他所者〉のあいだ― 足立 芳宏 六二一四円

英詩の文体論批評―イエイツ、ラーキンを中心に― 宮内 弘 三四九五円

アフリカ農業の諸問題 高村泰雄・重田眞義編著 六〇〇〇円

アリストテレス『天について』〈西洋古典叢書I-5〉

池田康男訳 三〇〇〇円

プルタルコス『モラリア』13 〈西洋古典叢書I-6〉

戸塚七郎訳 三四〇〇円

トログス/ユスティヌス抄録『地中海世界史』

合阪 學訳 四〇〇〇円

〈西洋古典叢書I-7〉

■大阪経済法科大学出版部

転換期の地域経済・社会 〈経済研究所研究双書3〉

マクロ経済学

平井 正文 二六〇〇円
星川 順一 一五〇〇円

■関西大学出版部

江戸時代の日中関係史料 〈蘭園鶏肋集〉

ドイツ文芸検閲史

大庭 脩編 八〇〇〇円
D・ブロイアー/浜本隆志他訳 五〇〇〇円

■九州大学出版会

刑法学における歴史研究の意義と方法

内田 博文 九五〇〇円

琉球列島維管束植物集覧〔改訂版〕 島袋敬一編著 一八〇〇〇円

A Framework of Economic Models in the Medium-run

〈久留米大学経済叢書c〉 駄田井 正 五〇〇〇円

内生的経済成長論 I 1 ロバート・J・バーロ、

X・サライーマーティン/大住圭介訳 五六〇〇円

旧韓末「日語学校」の研究 稲葉 継雄 一三〇〇〇円

尋常中学校の成立 新谷 恭明 七〇〇〇円

マレーシアの民族教育制度研究 竹熊 尚夫 四二〇〇円

中世後期南ネーデルラント毛織物工業史の研究 藤井 美男 七〇〇〇円

写真で語る細菌学 天児 和暢 五〇〇〇円

国際新秩序を求めて—R I I A、C F R、I P Rの

系譜と両大戦間の関係—〈長崎純心大学学術叢書2〉

塩崎 弘明 三四〇〇円

■東北大学出版会

呼吸器外科学

仲田祐・藤村重文 一五〇〇〇円

心の科学史—実験心理学の誕生— 高橋 滯子 五〇〇〇円

■流通経済大学出版会

江戸の阿蘭陀人定宿・長崎屋物語

坂内 誠一 二五〇〇円

■大阪大学出版会

文書館用語集

全国史料保存利用機関連絡協監修 一五〇〇円

▼『インターネットはからっぽの洞窟』という本がある(クリフォード・ストール/倉骨彰訳/草思社)。ただし、原著のタイトルは Silicon Snake Oil。「訳者あとがき」によれば、snake oilとは「似非薬のことだそうだから、日本流に言えば「ハイテク時代の蝦蟇の油」とでも訳すべきところだろうか。

▼これだけインターネットが普及し、日夜話題になっていいる現状からすれば、当然、それに反発する人も増えてくる。「からっぽの洞窟」は、そうした人たちに狙いを定めた、見事なネーミングと言わざるを得ない。批判的ながら、さすが「タイトルの草思社」ではある。

▼しかし、このタイトルは誤解を招く。著者自身が本文中で使っている言葉(原文は見えない)だから、必ずしも不適切ではないのかも知れないが、「からっぽの洞窟」という言葉からは、無意味・不毛といったイメージしか思い浮かばないだろう。それは、著者の意図とは異なる。

▼著者は「はじめに」の中で、次

のように書いている。

僕はインターネットの入り口に立った人を追い返すつもりはないし、インターネットの恩恵にこうむれるのは自分だけだと言いたいわけでもない。……僕はインターネットがアメリカの津々浦々、アメリカじゅうの家庭に普及する日を心待ちにしている。

▼つまり著者は、インターネッ

●製作の現場から 17

あなたの宝を洞窟へ

ト自体を否定しているわけではない。むしろ逆だ。それがメディアにすぎないことを強調したかっただけだろう。中味がなければ「からっぽ」だし、ゴミを入れれば「ゴミ箱」もなる。しかしそれは同時に、宝石箱にも、千両箱にもなり得るということだ。

▼それは、どんなメディアでも同じだ。どんなに厚くても、中味が「からっぽ」の本はいくらでも

あるだろう。インターネットだけが特別なわけではない。

▼インターネットが他のメディアと決定的に違うのは、自ら発信できることにある。誰もがテレビ局を持てるわけではないし新聞社を経営できるわけでもない。自分の書いた小説や論文が出版されるには、才能に加えて僥倖が必要だ。ミニコミぐらいなら可能だとしても、それだつてかなりの金がかかる。インターネットなら、たいした金もかからず、はるかに広い範囲に発信することができる。

▼あまりにも簡単だから、雨後の筈のごとく個人ホームページが誕生する。(僕自身のHPも含めて)その大半はゴミかもしれない。だが、それを否定してしまつたら、インターネットの価値と魅力は半減するだろう。ゴミの中から、千に一つ、あるいは方々に一つ、従来のメディアでは掘りあげられなかった作品が見るべきアイデアが誕生するかも知れない。少なくとも僕は、そう期待したい。

▼大学出版部協会・編集部会で

は昨年十二月の月例勉強会に、「青空文庫」の提唱者・富田倫生氏をお招きした。「青空文庫」は、インターネット上の私設電子図書館の試みである (<http://www.voyager.co.jp/azozora/>)。富田

さんは、自分が書いた本を何部かまとめて購入しようと思つたとき、すでに断裁されてしまつていたという経験から、このプロジェクトを始められたという『出版ニュース』97年10月下旬号参照)。従来の「出版」の限界を越える試みの一例として紹介しておきたい。インターネット

▼さまざまなインターネット批判を聞いていると、大体において「受け身」の発言であることに

気づく。誰もがホームページを持つべきだとまでは思わないものの、テレビや新聞のように、一方的に与えられるメディアではない、という認識だけは持つべきだろう。「からっぽ」だと思ふなら、「ろくな情報は得られない」と批判するなら、あなたにとって価値ある情報を、洞窟に運び込んでほしい。(穴居人)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0009 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都日黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-39-8935 FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8730 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-0853 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-368-1121 FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX. 06-877-1614

大学出版(第36号)'98冬 平成10年1月10日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956

頒布価格100円 千共